いま私たちは何をなすべきか

「システム改革への実践のために」という副題の『世界』2020 年 4 月号の宮本憲一先生インタビューを読んだ。じつは最近までインタビューを知らなかった。『世界』は毎号目を通してきたが、2 年前のコロナ禍の影響（緊急事態宣言などで図書館も長らく閉館）でチェックできなかったと思う。冒頭と最後だけを紹介したい。

世界レベルで見れば、人類が現在直面する大きな課題は、核の問題と地球環境問題です。気候変動による環境破壊が、重大な社会的災害を引き起こす原因になっています。日本でいえば、気候変動の影響に加えて、地震などの自然災害も深刻で、いわば災害の世紀を我々は生きています。こうした中で、維持可能な社会をどう作っていくかを真剣に考えていかねばなりません。

その模索と実践の主体として、私は、市民運動が非常に重要な意味を持つと思います。経済活動の場では労働運動があり、そして生活の場では市民運動、住民運動があります。この両輪が揃うことで未来への展望が開けてくると言えます。とりわけ現在の社会では、環境、教育、医療・福祉の問題が重要性を増しています。この分野では市民運動の重要性がさらに増してくるでしょう。

多くの問題を引き起こす原因となっている現在のシステムを改革しなければなりません。私は、国際的に見ても、問題意識を持つ若い人たち、そして女性たちが、システムを作り替えていく主体になっていくのではないかと感じています。また、かつての日本には大都市のシステム改革に熱心な市民運動が存在し、革新自治体などの誕生と発展に大きな役割を果たしましたが、現在は農村や地方都市の住民に共通の危機意識が存在しています。とりわけ東京オリンピック以降に起こるであろう経済的変動は、これまでの東京一極集中では解決できない課題を可視化するのではないかと思います。

しかし、全体として見れば日本の労働運動と市民運動が非常に弱体化している事実があり、問題意識、危機意識は広く存在していても、どう進んでいけばいいのか、解決の方向はどこにあるのか、という議論が不足しているように思います。維持可能は社会を足もとから作っていくための学習と運動づくりが求められていると思います。

現在の日本の政治の劣化は、きわめて深刻です。国民的な世論と運動を続けるとともにシステムの変化を模索するための地道な学習と、草の根からの実践が、何よりも必要なのだと思います。

インタビューでは、高度成長期の三島・沼津の住民運動、大阪をあんじょうする会や望月宮本塾（現在は信州宮本塾）なども紹介されている。「地域の現実から出発し、学習を深めて、10 年かけて政策を作っていけば、自治体に影響を与える市民のネットワークをつくることができるのではないかと思います」と。

（2022 年 5 月 21 日）